

結縁の日めぐり その一

——信念

師はアリストテレスを引用して言った。「真理を探究するうえで、自分にとって最も大切なものを放棄してゆくことは望ましいことであり、また実際に必要なことであるようだ。」それから師は、「真理」ということばのところに「神」ということばを置き換えた。

後になって、ひとりの弟子が彼に言った。

「わたしは神を探求するのに、なんでも放棄してゆく用意ができております。富ですか、故国ですか、いのちですか。ほかに何か放棄できるものがありますか？」

師は穏やかにこう答えた。「人が神について持っている信念がある。」

その弟子は悲しそうに立ち去っていった。

自己の信念にしがみついていたからだ。

彼は死よりも「無知」のほうをもっと

恐れていたのである。

……………古橋昌尚訳

この一文は、世界的に高い評価を受けている、霊的指導者アントニー・デ・メロ師の4冊目の著書『沈黙の泉』から抜粋しました。とある古書店で見つけたものです。この物語を読んで、いらだち、しゃくに障ったり、こころ穏やかでなくなったなら、著者の企図は達成されているのかもしれませんが。「最も優れた変化とは意図されずしてなされた変化」なのですから。

私たちは、一体、どこから来て、どこへ行こうとしているのでしょうか。「ほんとうの自分であること」を求めて生きているひとは、極めて少ないようです。

人間関係ひとつとっても、他者にこころを惑わせてばかりいます。相手が何を考え、期待し、計画しているかはどうでもいいことと、そろそろ、気づいてもいい頃です。自分自身を大切にし、慈しみ、愛することができない者は、相手を愛することなどできないことを想い出すべきです。私たちは、パートナーへの愛情を通して自分への愛情を求める、という最大の過ちを犯しているらしい。ただただ求めるばかりで、愛を証明しろといきまき、二人とも自分を見失う。一たす一は二にもならず、マイナスになってしまいやすい。魅力も、喜びも、能力も減退してしまうひととの関わりとは、決してそんなものじゃなかったはず。人生という、道のりなき旅路の途上で出会う相手に聖なる魂を見いだす者は、自分自身が聖なる存在であることを知っていなければならないと思います。

私たちは、自分の鼻面にさまざまな教義を得々としてぶら下げながら歩を進め、完璧なシ

システムを作り上げては、疑いを抱くことなく、信念に満ちて選択し、行動しています。そこに安住していれば、傷つくことが無いと思っているからです。それでいて、恐れと不安におののいているのです。このアンビバレントな思考の集積が神経症的な現実を創り出していることに意を解そうともしません。

ここではっきり云いましょう。かつて、そして現在も、偉大なマスターたちを迫害し、死の淵へ追いやっていたのは、私たち以外の誰だということでしょうか。どんな信念であろうと、堅固で一貫性あふれる信仰に根ざした宗教であろうと、神の教義という共同なる幻想の枠組みに従わせるために、ひとを殺戮してもいいのでしょうか。国家が政治的目的のためにひとを殺すのとどこに違いがあるというのでしょうか。ほんとうの現実とは何か。私たちは、問題のほとんどを他人任せにしては、誰かが教えてくれる、誰かが決めてくれるだろう、とうそぶくばかりなのです。そうすれば、自分の頭で考え、感じることは必要なくなり、責任を負わなくていいからでしょう。しかし、選択を留保することは、選択しないことを選択したことと同じことです。悲しいことに私たちは、価値判断をいやがる、怠惰な習慣性の生き物なのです。

だからこそ、こころの羅針盤を頼りに、醒めた眼で世界を躡わにしていこう。ただ、視 (discover) つめ続けていこう。覆えるもの (cover) を除く (dis) こと^{カバ}によって。^{ディス}

—————05/11/30 パウワウおじさん